

なでしこ

なでしこ

昭和十二年九月号

大村尋常高等小学校 発行

學校日誌

九月一日

休業

九月三日

金参用五拾銭也、なをしこ入、尋田、田中、箱子殿

九月廿六日

大村の地子校児童園藝會主催園藝品交換會
出品總數 四十八品
交換、賣却數 三十五品 五十五円

尋二級方

◎つり

中澤道彦

ぼくは、とみさちくんと、一しよに、つりに、いきました。さうして、ぼくが、水の中を、見ますと、おらいさんが、たくさん、あまりました。すると、すぐとみさちくんが、はりを、あらしめました。ぼくは、あついで、かへらうと、いって、あちうちに、おびいさん、が、つれまわした。ぼくは、おもしろくて、かへりたかったのも、忘れて、もって、あちまわした。そのうちに、とみさちくんと、ぼくに、ひっかけで、しまひました。とみさちくんは、こまうて、あちました。とみさちくんに、とみさちくんは、むりに、アゲ入を、さうして、かへって、まわした。

◎學校

伊藤秀雄

ぼくは、學校が、大さきです。學校に、いく時、ぼくは、きつと、とけいを見ます。また、ラゲオたいさうを、する時、うれしいです。おきやうしつに、入った時、べんきやうを、する、のは、大さきです。學校は、ぼくが、でもなし、あせぶ所でもなし、べんきやう、する所があります。ぼくたちは、學校の、せいと、ですから、みんな、べんきやう、を、して、えらい人にならなければ、なりません。ぼくたちは、みんな、一生けんめい、に、べんきやうを、したければ、日本の國は、まける、から、うんと、します。ぼくは、かへうて、来た時は、すぐ、とけい、を見て、べんきやうを、して、あせびました。

◎せみ取り 市木 眞

このごち、せみが、ふえましたので、せんに、つくって、もちうた、せみぶくらがあつたので、ぼくと、ぼくと

野ちゃん と それだけ ぼいじんぐう
山に せみとり に行きました。すると
せみの なぎんこ ばかりで なんにも
ほかには こゑ が 聞こえませんでした。それ
でも せみ が みえませんでした。それ
なか とれませんでした。おもしろいから
あるいて みると、だんぐり のところ
から 土から 空たばかり の ぬけ
がらが おちて 落ちてました。

④ちくぜんまる 長 若 燕 子
この あひだ 私 が おきて から ちくぜん
立って から ちくぜんまる が ぶーと
ならずして きました。私は 小学二年生が
くる のを たのしみ に して おりました。
私は 学校に 行きました。さうして かへそ
来てから プリント を しました。本やえ
に 行きました。小学二年生 を 下さいと
いひます。と、また 十一月 が こないと
いひました。私は おうち へ かへりました。
私は がっかり しました。

尋三の綴方

④カヌー 奥山 涼子

日は だんぐり とくれてきた。
私は おもしろい の花を とりにかいが
んに いった。
くろ岩の方 を 見ると 波が くら岩
に あたつては はしゃつと はねかへ
つて いくたびか まつ白な りがさを
あげてゐた。
そのとき 赤いカヌー が ころちへく
とはしつてくるのが 見えた。
私は うれしかった。
けさ おとうさんが つりに いくとき
かへつたら カヌー に のせる といふ
やくそく だったから してした。
朝 おとうさんが つりに いかれたカ
ヌー だ といふ と思つた。
まもなく あか についた。

おかしさん ぶい のと 聞いたのせ
また こない と いひました。きつと
つぎ の おね を くる かも しれない
と あつしやいました。

④ままごと エーリウシントン
私が ままごと を して あそんで おま
すと、ちいこ が あそんで おまよと
いった から 私 は あそんで おまよと
いったら あたい おかんぼに なるよ
と いったから させました。さうして
あかちさん あんた おなさい と いった
らば おかあさん もねなさい と いひ
ました。けれども おかあさんは よう
がある と いひました。おかあさんが
おなかい から よう を して おると
いつて してから おました。

それは おとうさんの のつた 舟でし
た。
私は みさあちやんと あいらやん
をよんだ。みさあちやん たちは
おのかがひに いったので はあ
いつて みた。
おぼろくして カヌー に のつた。

④あひる 小祝 係子

うらた あひるが 白は あます。
はり は 二四は ぐりおるます。
には とりが 一四は おます。
私は 朝は やく おさで あひるに
あさを きつて やります。
私が あさを やりに いくと 私
に とびついても ばけつの中へ とび
こんで あさを たべます。
私が わけて やりますと よろこん
でたが ます。私は あひるが 一ば
んか ほしい です。

だが、あひるの、鳴きこゑはうるさく、私はいやになりません。さうか、私があひるごやにいて、みるとまた、なごだした。私はあひるはかはい、ですが、なくのがさうひです。

んか、せんに、すんで、あた、すこし、やすみながら、とんぼ、とつて、かへりました。

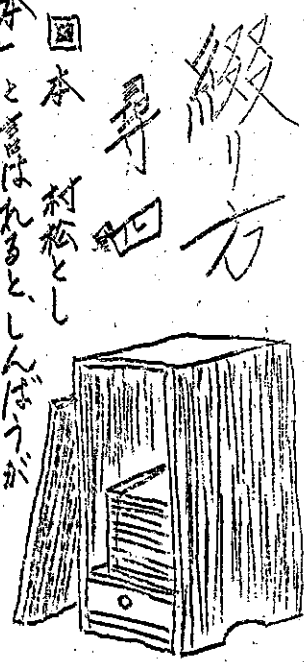
野口敏郎

夏休

あひる、このあひだ、にいりやんと、まさびで、ちやんと、三人で、あふぎ、うらへ、おはか、まゐりに、いきました。大判のはとは、から、さんちやんの、おに、のつて、あふぎ、うら、のはとは、いきました。

僕、夏休に、およいたり、つりをしたり、山に、あそびに、いつたりして、おもしろく、くらしました。おもしろい、夏休も、すきました。僕、一、生けんめい、べんきやうして、今まで、あそんだ、ぶんを、とりかへして、二が、さ、には、よい、せいせき、をとらうと、思ひます。

さうして、はとは、へつくと、すぐおたいちやん、の、ところへ、いつて、やくあんに、水をもつて、やまへ、いきました。そして、おはか、まゐりをしました。がへりは、うちの、はたけの、所を、とほつて、さうして、お父さ



綴り方 本

「本」といふは、と、しんぼうが、出来なくとも、とくに、まんがなどは、大です。讀出すと、むやに、なつて、しまつて、味は、れいも、た、「うん」と、だけ、なつて、ま、うな、い、の、で、を、ん、な、將、よく、し、から、れ、る。四年生の、讀み、で、取つて、屋を、本を、取らなく、なつて、何かが、さびしい、やうな、氣が、し、い、ぼ、ら、ない。だが、少年俱樂部、部、の、ぼ、う、け、ん、だ、ん、を、や、自、の、丸、筆、を、助、や、の、う、く、ら、な、ど、は、お、も、自、く、ん、讀、ん、で、も、く、ま、だ、り、な、い、くら、い、だ。まん、の、こ、く、ま、の、こ、ろ、を、け、と、さ、ぶ、ふ、あ、り、く、も、皆、す、ま、で、坐、け、ん、め、い、を、し、る。本を、讀む、た、め、に、な、る、し、が、お、お、ほ、え、ん、を、の、二、三、も、知、る、お、も、う、た、な、る。私は、本に

か、い、お、ま、も、の、中、で、こ、つ、け、い、ま、ん、と、か、は、い、ま、い、な、の、を、讀、む、の、が、大、す、き、だ。お、と、な、の、讀、む、本、を、お、ま、ん、と、讀、む、と、讀、ん、で、「手、紙、が、お、ん、は、本、を、讀、ん、で、は、い、け、な、い」と、言、う、と、取、り、げ、ら、れ、る、が、ま、た、つ、い、讀、ん、で、し、ま、が、少年俱樂部、部、の、ひ、や、う、ば、ん、の、ど、り、ち、や、ん、な、ど、ち、ろ、ろ、が、あ、つ、て、と、も、り、か、う、だ、か、ら、お、ん、は、お、ま、を、お、ほ、え、た、い、と、思、つ、て、讀、ん、で、居、る。此、の、前、四年生、を、讀、み、ながら、道、を、歩、い、て、お、た、ら、ど、ぶ、の、あ、る、の、も、知、り、ず、に、た、く、前、へ、進、み、と、う、く、「除、ち、や、ん」と、お、つ、こ、つ、て、さ、う、け、を、ぬ、ら、し、て、母、に、「道、を、本、を、讀、む、か、ら、進、つ、こ、ち、る、の、だ」と、言、は、れ、た、事、も、あ、る。私は、本、は、大、す、き、だ。今、度、又、九、月、号、を、樂、し、み、に、待、つ、て、あ、る。

少年俱樂部 鈴木 見

九月十日、少年俱樂部が、筑前丸で、来る、日だ。たのしみ、に、待、つ、て、あ、る、と、い、ま、く、九、月、十、日、に、な、つ、た。僕は、早く、見、た、く、い、た、ま、ら、な、い、

汽船も来た。今すぐ行つたつてないだらうか
ら、後が終つてから行かうと思つて學校
へ行つた。やがて學校も終つた。「さあ終
つたぞ」と思つて急いで家へ帰つた。母ち
やんが居ないので待つてゐると、少したつて来
られたので、一寸錢を借りて本屋へかけつ
けた。後倉雄さんが一足先に買つて讀
みながら歩いておた。僕もいよいよ買は
うとして本屋の中へ入つたりもう買切
れておた。僕はがっかりしたが仕方な
い。四年生を買つてがまんした。そして今
度来たら、どうしておいてもらはうと思つて、
本屋にたのんでかへつた。

四 支那へ行つてゐる矢隊さんへ、豊島總
領國のために働いておて下さる矢隊さん方
の御くわうをありがたく思つて居ります。
私は小笠原島に居りますが、先生から又
はラヂオなどで戦争の事を聞いて居り
ます。島からも先日、出征される矢隊があ

りました。大勢の人々で、學校に集つて其の
かど出を祝ひました。船に乗つて出發さ
れる時には、見送りの人たちは萬歳をさけ
んで日の丸の旗をゆぶける程打振りました。
港に集つて居る船などは、みんな汽笛をな
らして、本とうにえうかんでした。私たちが
飛行機などをつくるお金をけん金するや
うに、先生からお話がありました。村の人た
ちは、出征された矢隊さんが、御國のために
つくし、無事にがいせんされるやうに神様や
ほとけ様にお願いのりして居ります。私達も
一生けんめいに勉強して、よい日本人となり、矢
隊さんのやうにお國のためにつくします。
それでは、お体をお大切にしてください。
なう。

お國のために、遠い支那へ行つて、命のかかり戦
つてゐる矢隊さんの、御無事を祈ります。矢
隊さんにお骨折をありがたく思つて、私達も此の戦
場として一生けんめい勉強して、此の争戦に
あつたやうに、よい日本人になりませう。

五 尋 夏休の 思ひ出

方 綴

つり 堀口保信

カヌーは岸をばなれた。芳朗君がこいだ。か
まをうごかす度に、ぼやちりぼやちりと水がどい
早い早い。また、く間に二見岩についた。もう
カヌーは二三をうたてゐた。僕等もいかりをお
ろしてつりはじめた。初に僕が「うさ」といつて
上げて見ると、いまだひだつた。次に芳朗君がど
うだいといひながら上げると、それはどいどうだ
つた。芳朗君はおこつてどいどうをいふはたに
たいきつめた。一時間ばかりつてゐると、まはりに
居るカヌーも、いつの間にかあなくなつた。

扇浦 大川武士

永い夏休みもいつの間にか夢のやうに過ぎてし
まひました。僕は毎朝學校に行つたので、何だ

か思ひきりあそべなかつたやうな気がします。
けれどたつた一日面白くて忘れられない日か
あります。それは八月六日先生が扇浦につれ
て行つて下さつた日です。僕等は泳いだり、お
話まきいたり、すいすいお話を食べたりにあそ
びあそびました。僕はおもしろくて、
目がまはるかと思ふほどでした。その内だん
だんと太陽は西に沈みさうになりましたので、
僕等は通ひ船につてかへつて来ました。

遠足 豊島洋

八月六日、私たちが待ちに待つてゐた日です。
朝早くからおべんたうを作つて、もらつて午前
七時出発しました。とんねるをくわいり、道
を歩いて、扇浦についたのは十時ごろでした。
白い砂濱の上を波があつてゐる。水はきれ
いにすんで底まで見える。皆は着物をめぐの
ももどか、さうに我先にと海にとび込んで行
く。私はまだ泳げないので、砂の上であそんで
みた。砂でだんごを作りそれをぶつけてあそ

人だり、山をきづき、道を作りとくわろを作つて
だんごをころがたりしてあそびました。一日
中日にあつてみたので、歸るころには皆の顔は
真赤にやけてしまひました。「黒い坊がやなくて
赤い坊になつた」と笑ひました。かへりは通ひ船
にのりました。いまままであそんでみた、演がだん
だんはなれて行きます。午後五時頃大村につま
ました。

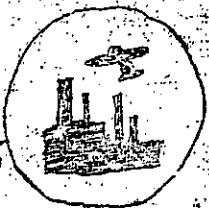
● つり 雨宮美恵子

本船が出帆する日の事でした。暑中休暇にか
へつてきて又今日の船で東京へ行くといふ兄が
「これがさいごだ。つりに行かう」といつて大村
から秀やすさんを連れて来ました。しばらくし
てつりの用意が出来たと見えて、兄が秀やすや
「行かう」と言ふと、秀やすさんは「みえちゃん、
海岸へ行つてしまふぞ」と上つたので、私は帽子を
取つて大急ぎでかけ出しました。すると、つり
の子が「うにを」とつて来て、「おくれ」と後からどなり
ました。

海は平にすんで鏡のやうです。真上からは太
陽がかん／＼とてら／＼とみえます。
「つれた／＼」と秀やすさんが大聲を上げま
した。見るとえさ取りでした。兄さんはしま
だひを八匹フリ上げました。かへる時兄さん
は海に向つて「又来年もこのやうにつれますや
うに」と言つて帽子をとつておどぎをしまし
た。

● おべんたう 沖山フサ子

夏休に一番楽しい思ひ出は扇浦にあそびに
行つた事でした。海岸につくと男生はすぐは
だかになつて先生およいでい、ですかといい
ました。先生が「あと五分」といふと男生は一度に
「あいや」といひました。間もなく先生が「し
といつたと思ふと男生はもう泳いでおりました。
私もかつこちゃん達と海水着をきておどぎま
した。「しばらくたつとおひるとなつておべん
たうを開きました。そのおいしき。私はこ
なにおいしいと思つたことは今までにありま
せんのでした。(以下略)



尋六級方

高真

西村美代子

僕たちが笑ひをこらへて見てゐるとなが／＼
おどぎをやめなさい、こらへ切れなくなつて
僕が遠におき出してしまつた、すると急に
おどぎをやめて泣き出した、

私は寫眞を見るのが一つの樂しみです。
誰の寫眞を見ますかと言へば、由姉ちゃん
寫眞を見ますと言ふ。寫眞を見つめてい
ると何となく悲しい。それも当然の事由姉
ちゃんに帰らぬ人となつたのである。
由姉ちゃんに亡くなる前にはとてもやさしかつ
た。私ともけんわをした事もあつた。
それでもいつもやさしかつた。今考へてみると
悲しい。けれども寫眞を見ると私を見て「いつ
か」と笑ふ様子が見える。ほんとに悲しい。
けれども寫眞を見るとなぐさめられる気がして
ならない。

面白かつた事 長田克介

或夜父がラジオをかけてゐると丁度音楽が始つ
た。台所の方から香櫛が赤くしぼらく坐つて聞
いてゐたがうかば出したのがおどぎを始めた。

ほんとうにガジマルは長い。根を高い所か
らぶらぶらしてゐる。根といふものは木をさ
へて養分を取るために地の中にかんばつて
ゐるのかたいていの木であるのになせか此の
木だけは地中にある根もついでるちが又多く

横山セツ

そのたびに僕等はにくり支那兵を早くやつ、け
たいと云ふ氣持がわき上るのを禁じ得なかつた。

佐山和子

土用波が白い歯を見せながら寄せこくる。
米ちやんと波止場で泳いだ思出である。冷い海
水の中に体を入れると体のしんまご冷くなる。
スーと泳ぎながら永田丸の綱の所まで行かう
と思つて後をふりかへると米ちやんもこつちに
向つて泳いで来た。どうしてか米ちやんと顔を
見合せると笑つてしまつてしまらない。終ひに
はあんまり笑ふもので海水まで吞んでガク／＼
しさうになつたので急いで引返して来た。岸壁
の所にはホートがつないである後の方には綱が
ある。其の綱につかまりながらいふ事なことを
話しては笑ひ又綱をはなれて立泳ぎをしなから
米ちやんのまねをし、米ちやんは又私のまねをし
こはハク／＼しさうになるのぞいそいで綱に
つかまりまわいである中につつの間にか覺気が
ついであたりはうすぐらくなつてくる。聲のこ

二人は海から出てきこさよふなら又明日の
と云ひながら別れの家路に向ふ。家のかへつ
てくるともう夕飯の香りが匂つてゐた。かう
して休みも楽しく過した。

奥山登喜子

夜露がじつ／＼とした坂を越えやうやく切
通しまで来た。まだ日は出てゐない。そこで
一休みした。左右を見れば見渡す限り青々と
した米々や島が見える。真正面には廣々とし
た海がひらひらと見える。その上をカヌーか一
艘走つて行く。其の時向ふの島の方から誰か
を呼ぶ声が聞えてきたので私も立上り歩き始
めた。今度は降り坂だから前より楽だ。急い
で行つてみるとネリが大きくなつてゐたので
風を散らす二へひらひらと採り始めた。採り終
つて見ると重く持つのがいやになつた。ま



高二

或る秋の秋夜堤トイ 太田智

昨夜僕が庭から歸つて来たのは九時頃で下は
まだ少し早いと思つて後止場に行つて岩壁
の上に登つて其處に寝た。窓は白か、ぼんぼ
やうな銀世界のやうだ。せん存ことを考へなが
ら下を見ると波が何となくとろつて金波
銀波をたまたまよせよる。又燈臺を見上げ
ると青い光を放つてゐる。港口を見ると存
んが懐かしい様を感ぜられた。どうも僕が
當地に來た時何年か後で見ると又斷た
大村が見えなかつた。見えた時父島は
變つた存ある僕が思つた。それから船室に
行つて着物を着がへた。それと甲板に
行つた。僕がと考へたと思つると大が向ふ
で叫んでゐる。僕ももう選んで思つて岩
壁から下りて定めた。だん／＼我家に近づい
た。僕はよくやうやう歯をみがいて寝床に

はつた。

秋を迎へて 宮崎やす子

一雨毎に涼しくなり此の頃の候氣は
やうやく秋らしい氣分が吹いて来た。
空にはとんぼがまゝく輪を廻りかきながら
秋の物類を飛んでゐる。木の上ではせみかこ
も又知何にも樂しやうは鳴いてゐる。木の葉
もやがては黄味がかつて来る事やせつ
何となく秋の好時期の此の秋をたのびんやり
過ごすには何となくいいやうな氣分がある。
古語に曰く「天高く鳥肥ゆるの節」と秋夜
に運動に……これが非常時秋夜の
務めでありませう。このよりの秋を迎ふるに
あつた大いに働ませう。
雨にうたれた小判草 植野み代
いよく二時間百の秋葉が始まつた
先程から降り續いてゐる雨はまじく勢
を増して来た。
隣の教室から聞えてくる聲も雨に打
ちかされて、さうして、唯水音の教室を

